



私の視点

1980年代、米スタンフォード大経営大学院を卒業した若い技術者だった私は、ハイテク分野での米国の優位に、日本がとって代わろうとしているのを目にしていた。日本は世界から学び、そして追い抜いた。他国は追いつこうと苦しんでいた。

今日のシリコンバレーの光景は大きく異なる。日本企業の存在感は縮小し、米国企業はデータ分析、機械学習、ソーシャルネットワークなど成長著しく利益率が大きい分野で優位を取り戻した。日本はこうした最先端分野全てで後れをとっている。

日本に熟練した人材がいないという点ではない。携帯電話のインターネットはNTTドコモとDDIが日本でスタートした。2000年に、カメラ付き携帯を最初に作ったのはシャープだった。人工知能(AI)分野ですら、第5世代コンピュータでお金と人材をつぎ込んだのは日本企業と日本政府だった。

ではなぜ日本は立ち遅れたのか。多くの理由があるが、根本的と思われるのはオープンさに欠けることだ。ソフトウェアや、インターネットの世界では、戦略的な共有を図ることが新標準だ。グーグルはスマートフォンの基本ソフト(OS)アンドロイドを公開しているし、いまやAIのツールも公開し始めている。フェイスブックはデータセンターの基本設計を他社がコピーできるように公開している。

らしさ薄め 海外人材使え

世界に遅れた日本企業

一方で、日本は製造分野でも遅れている。フォックスコンやフレクストロニクスといった委託製造会社を使う動きが遅く、系列会社を好む。日本のコスト構造は高いままで、供給網は需要の変化への反応が鈍い。変わるために必要なことは何だろうか。

第一に、日本企業はシリコンバレーでの存在感を増し、アップグレードする必要がある。進化するテクノロジー基盤を利用できるようにするためだ。第二に日本企業は「日本らしさ」を薄めるべきだ。成功する連携を築くためには、日本企業は世界最高の技術やマネジメントの才人を雇い、自社に定着させ、活躍させることができなければならない。

そのためにも、日本は(かつては自らがやっていたことだが)、いまは中国や韓国企業に倣って、学生たちをもっと外国で学ばせるようにしなければならない。さらに、シリコンバレー・ジャパン・プラットフォーム(SVJP)のような日系人組織を有効活用する必要もある。そして日本企業は外国企業の買収を、企業資産やテクノロジーを得るためだけでなく、現地のトップの人材を取り込むために活用すべきだ。それが、国際的に相互につながった世界に合わせ、日本企業の文化を変えていく必要があるのだから。

◆投稿者手紙 csiten@asahi.com
へ。電子メールでも掲載します。